



オフセット印刷機械の発達史 『鍛冶屋人生』

(1) 町の鍛冶屋

史談会開催日

昭和44年(1969年)9月2日

■ 語る人

島田 万次郎 氏

(浜田精機鉄工所専務取締役)

■ 【島田万次郎氏略歴】・

・明治31年4月15日生れ。大正6年東京高等工業学校附属校卒業。同年東京ギヤー製造所入所。昭和9年10月浜田印刷機製造株式会社になり取締役役に就任。昭和16年2月株式会社浜田精機鉄工所に商号変更になり引続き取締役工場長。昭和25年5月株式会社浜田精機鉄工所専務取締役に就任。現在に至る。

■ 【表彰】

・昭和30年2月関東地方発明表彰により特賞を受ける。昭和30年3月発明協会中央表彰により発明賞を受ける。昭和31年11月印刷機械の発明、実施による産業功労者として千葉県知事より表彰を受ける。同年同月発明協会より優秀賞を受ける。昭和35年4月日本印刷製本機械工業会より印刷機械の功労者として表彰を受ける。

私をご紹介頂いた通り明治31年4月15日生れでして、当年として71歳と8ヵ月でございます。実は私は、学校は誠に権威な学校を卒業しておりまして、当時としましては高等工業附属職工徒弟学校と言いましてそこを出ました。しかし、今考えてみますと、官立としては全国で1つしかなかった学校で、私どもの同窓には今をときめく参議院議長の重宗雄三氏が3年前の卒業生にいます。またその他にも交際などは少ないのですけど大会社の社長さんなどもございます。とくにこの業界には、先般ご他界なさいました三省堂の今井直一さんも私の2年先輩でございまして、今井さんは上級学校で勉強されたわけですが、私も上級学校へ行くつもりで勉強を始めました。しかしどうも生来の怠け癖もあるのでございましょう、一遍習ったものをまた勉強するのは何かばか臭いような気がしまして、結局、月謝の滞納が起こってきたわけです。そのうちにこれが溜まりまして、除名されるというところまで来て、なかなか納めきれないのでどうとうその後の進学を諦めることになりました。それが大正3年でした。

その頃、私がふらふらとしていました頃にたまたま通り合わせたのが本所の若宮の中村鉄工所で、夏目漱石の「坊っちゃん」ではありませんが、その看板が出ていたので、何の気なしにポコリと飛び込んだのが、この印刷界に入った本当のきっかけでありました。決して印刷機械をやろうとして一生懸命勉強していたわけではございません。たまたまこういう機会に入ったわけですが、私ども機械と言うと工作機械が機械の王座だと考えておりまして、ガタンピシャ、ドタンピシャという印刷機械をなんだこんなものかと思いましたが食べるほうが先でしたので、その頃図面を描くという人はとてもおりませんでした。幸い、私は図面に関しては、ただ今で言う鋭角な企画には到底合ってはおりませんでした。スケッチしたり、型作ったりすることについては、自分自身としても17、8の紅顔の美

少年でしたけれども、自信というほどではありませんが見通しというものを持っていました。しかも印刷機械というものがまだまだ町の鍛冶屋とでも言いますかそんな感じでした。後年でございますが、よく印刷屋でトラブルが起きたときに、設計の問題で印刷屋に参りますと、鍛冶屋さんお茶が入ったよと言われたのが耳から抜けません。森の鍛冶屋は歌になりますが、町の鍛冶屋ではどうも……。

(2) オフ機への工夫

しかし、鍛冶屋と言われてもこれに対して決して否めない点もございました。私どもがやっておりました、その中村鉄工所には総員で34、5名がおりました。

大正4年頃ですが、当時印刷機械屋さんというのが確か本田鉄工と京橋のほうに輪転をやっている機械屋さん、断裁機の余田さんと現存しておられる斉藤さんも神田辺りで活版機械か何かをやっておられたと伺いました。もちろん今日の東京機械さんは、専売会社のタバコの機械をやっておられてそのかたがた印刷もしていたと聞きました。それより数年前になりますが、アメリカのスーベル・フォードマン・プリンティングマシン会社とかいうところのアルミの機械を凸版印刷の本所工場に何台か入っておりました。ちょうどそれに対して、浜田初次郎が中村鉄工所の助成としてそのいわゆる親方という形で仕事をされていて、もちろんまだまだお若く、颯爽たるものでございますが、その方の話によりますと、夢物語りのようですが、50銭玉ぐらいの大きさのロールを1本入れて、一応アルミ版の機械ですが、そして、それでオフセットを造るという試作にかかっていた時に、私が入社したわけです。先程もちょっと申しましたが、図面についてわかる人がいませんでしたので、要するに鑽（たがね）とハンマーを持って歩けば、いわば全国どこでも飯が食えたという時代でありましたので、結局見よう見真似で造りましたが、それをまずもって図面化するということを仰せつかったわけです。もちろん私にしても印刷機械のイの字も知らなかったわけですから無我夢中でした。当然、私としては図面を品物にするということはよく知っていましたから、その方面では非常に重宝がられたわけです。

また、その何年前かは存じませんが、石版機械というのがございました。これは私が入る5、6年前であったろうと思いましたが、当時、日本橋辺りに浅沼商会という写真の材料屋さんがありました。それと三越の前にあった中西京太郎さんというインキ屋さんのお二人の



幹旋で、中村機械が引き受けてやったのがありました。それもおそらくは図面がなかったの見よう見真似でやったのでございましょうが…

大正5、6年頃ですが、芝にあった小島プレスの前身で、先代の小島さんが経営なさっていたブリキ板の印刷屋さんがありまして、ここに石版の上にもう1本ロールを乗せた、いわゆる転写銅を乗せたような形の2本のロールを使ったブリキ板の機械で、オフセットの原理をそのまま使ったものが既存であったわけです。そこで、アルミ板を使った直刷りする中にオフセットのブランケットの胴を1本入れて転写するという事は浜田初次郎に言わせると、オレが発明したということになっていますが、数年前にアメリカで発明されていたということも聞きました。それにしても、一応転写してから印刷するという事は、平版の印刷をゴム版にして印刷する方法は常識的に考えてもいいと言うことに気が付いて、作り始めたのが大正4年でした。

— 当時は印刷機屋も少なかった —

(3) 機械工というものは……

アルミ版機にゴムロールを増設して造った機械の第1号機を納入したのが、銀座の三間印刷でした。当時、大きな日本娘の美人画のポスターを刷りました。今見れば随分チャチなものでしたが当時としては、立派なものを刷ったなあという記憶があります。その時代、そのアルミというものは、三間さんのを造って以来、ガラッと無くなりまして、石版は残っていましたがその後、やはり大正5年ですが、三間さんに菊全判の石版、これは機械としましてはかなり大きなものになります、それを1台造れと言われてまして、その時、四六半裁判の石版をスケッチして造った覚えがございまして、もう石版と申しますと精々1分間に17、8枚の回転ですので、今ではバカみたいな話しですが、一応石版でなければ印刷が出来ないというか、不適當であるというのか、例えば、花札のごときものは、ずっと石版で印刷していたように記憶していますし、その後も菊半裁ぐらいの、精々ハイスピードと申しましても1分間に24、5枚の石版機を何台か造ったこともございまして、で、オフセットもこれに平行して造っていました。先程申し上げた石版機械の二重回転装置なんて言うものの特許を取ったと浜田初次郎なんかは威張っておりましたが、これはむしろ、石版に2度インキを着けて一遍刷って、要するに石版の上のロールを一度休ませると言うことで、考えてみると非能率的



なものです、そういった機械も当時要請を受けていました。石版機械というものをよく見聞きしておりましたときに、その石版というのは今のストップシリンダーの活版にちょっと似てはおりますが、それより見当がやかましいせいでああいう装置が生れたんだと思いますが、一応大きなクランクのモーションによって下の版板を動かす、その軸にロールを止める装置のカーブがあります。カーブなどもそこに潜って鑽とハンマーを使ってそれを仕上げていく。これは浜田初次郎などは鑽を持つということは人後に落ちんという程の名人でございました。

今では、鑽なんていうものは、用をなさないもので、私が3年目に実習で、学校を卒業するとき鑽で、平らな面の検査をやらされたことがあります。機械工というぐらいの時代でしたので、鑽で表を仕上げたというようなことでしたので、これはもう鍛冶屋と言われても仕方がないなあという感じも持ちますが、一応そんな程度でございました。オフセットを最初に造っておりました当時、そのシリンダーは、グラインダー研磨をする程の機械を持っておりません。

従いまして旋盤で削って、ようやく機械の組み立てが終わって、バラしていよいよペンキを塗るときにヤスリで一生懸命磨いたことを覚えておりますが、随分今考えてみますとシリンダーの直径なんでものはいい加減なものであったと感じられます。とにかく研磨というものもございません。後年、なかなか中村も研磨板を買うというところまでいかないの、確か現存しております南千住の製紙機械をやっていた会社に研磨板がありましたので、そこをお願いしていたこともありました。出来初めはみんなシリンダーのシキメを落して平らにするのにヤスリでこすっていたという時代ですので、およそその精度もおして知るべしだと思います。しかも印刷機械そのものも、中村鉄工所でわずか、34、5名という人間と、ほかに協力工場は、現在の中島さんの先代があり、また既に物故された多くの方もございますが、実際に着手しておられたのは百人以内であったという時代でした。

— 初めてポスターを刷る —

(4) 町工場

その時代、印刷機械関係に携わる人は百人以内という人数でした。活版関係にしても、確か大橋の袂に本田とかいうのがかなり後年まであったことを記憶しておりますが、菊八か、要するに小さなストッ

プシリンダーの活版をやっておられまして、その後も海外のダウソンというストップシリンダーのトッパン会社、あるいは当時の秀英舎でもかなりたくさん入っていたようです。そういった小さいものをやっておられた工場というのは、やっぱり町工場でございます。これは昭和に入っても、戦前までは私どもも、印刷機械というのは、機械の仲間に入らないというような意識をもっていました、自分でも何か恥かしく思っていた時代でした。今の印刷機械を考えますと、こんなにも精度の高いものかと、その頃を思いますと全く夢のようなことです。

大正6年だか7年に、秀英舎に初めて、ケーニッヒバウワーの書籍輪転が入りまして、これは当時寺内篤太郎さんがその現場の責任者で、その方の好意でそれをスケッチさせていただいたことがございます。それも見たときに片面2色ずつの両面4色になります。書籍輪転の菊判だと思いましたが、それを見たときに私も実は尻もちをついたわけで、こいつをスケッチしようというのは大変なことだと思ひまして、私のアシスタントはひとりもいませんでしたので、中村鉄工所の伴さんで、禄一郎さんといって慶応の商工学校を出られて、ブラブラしていたので“たのみます”と言って手伝ってもらい何とかスケッチして造り始めました。これを造ってみて印刷機械は相当なものだなあという感じを持ったわけです。とにかく今では何でもないことですが、見上げるぐらい大きなもので、それにローラーがずっとついてまして、2色ずつですから、印刷部が2つ加わって、4つのインキ装置があってこちらのほうには、確か2百回転ぐらいの勘定であったと思います。

そういった大変な機械であったわけです。またもうひとつ大いに感謝しなくてはならないことは、大正6年に神田の鎌倉河岸にオフセット印刷合資会社と言ひまして、現在新村印刷の社長である新村長次郎さんの奥さんのお父さんがおやりになっていた会社ですが、当時、中村製のオフセットが2台か3台入っていてハリスの半裁で、これはハリスの原始的なもので、紙を上の方に斜めに置いて1枚1枚繰り出すというような機械でしたが、これが1台入っておりまして、そこへアメリカのポッターが輸入されました。これは浜田初次郎の商魂の逞しさもありまして、あの時に無償で組み立てるからと言う約束でスケッチさせていただきました。これがオフセットの自動の本当の始まりだと思っております。そしてこの機械をそのままのものを組み立てるといふことは、当時の中村鉄工には到底設備がなくて出来ませんので、出来る設備で、例えばロールのメタル回りを角にして昔の手差しのようなアルミ時代のように直して造ったのが大正6年の暮れでした。これを確か凸版印刷さんに納めたとい



う記憶がありますが、その後、中村の自動機ということで大分出ております。

話が前後しますが、オフセット印刷合資会社の中西虎之助さん、三間先生、寺内篤太郎さん、後年になりまして市田幸四郎さん、井上源之丞さん、さらには大橋光吉さん、石山賢吉さんと言う方々には、もちろん商売上の意欲という点はありましたが、それ以上の意欲というか、お力が、いわゆる印刷というものに対しての将来の礎となられたと言うことに対して今日の印刷機械がここまで成長したと本当に感謝しております。

(5) 大成の好期は震災

当時、ポッターをスケッチして造った自動機を中村の自動機として印刷会社に納めました。それからケーニツヒパワーの輪転機をスケッチしてある程度木型を造って兵役に就いたわけです。兵役から帰ってまいりましたのは大正10年でしたが、その時浜田では東京ギヤーという内職を始めました。これは中村鉄工所の総領のお嬢さんを貰ったという形で、中村鉄工所の母方の姓が浜田でございまして、結局その浜田家を継がせるために中村の総領の娘を嫁がせたわけです。


浜田初次郎という人は大変商魂の逞しい方で、東京ギヤーもいわば内職で始めた仕事ですが、この人はなかなか幸運な人で、この時第一次世界大戦の勃発で歯車がとてつもない需要を受けたわけで、当時かなり大儲けをして、自分で独立が出来る要素が出来たわけです。そして私が大正10年に兵役から帰ってくるまでの間に、確か、市田幸四郎さん、伊東亮次さんなんかとアメリカへ渡りました。向こうへ行って、何をしてきたかということは、色々逸話もありますが、今までは全くどこへ行くにも板ゾウリは、雨が降っていたら下駄履きか、どこに行くにも、もう油だらけのオーバーを着て出て行ったものですが、あちらから帰ってきた時には、人間がガラリと変わって蝶ネクタイなんかを締めて、えらくハイカラになってしまって、そんな時期に私が帰ってきたわけですが、私も、輪転機の設計をしてまだ機械を見ずに行ってしまったので、とにかくご飯を食べさせてくれるのならと、ちょうどその当時に亀戸の狭いところでしたけれど工場を建築して、その工場で私と浜田初次郎の後添えの兄貴とかいう人とでやることになりました。



その兄貴というのが、私の学校での指導員であった人で、顔見知りでした。

結局、工員もあまりおりませんでした。一応そこでやりましょうということで、過去に中村で設計したものを繰り広げまして、それを改良してやり直したものが2回転のオフセットです。これが大正12年に出来上がりまして、これを当時、榎町の日清印刷さんに納めさせてもらいました。ところが、試作でやはり上手く行きませんで持って帰ってきました。せっかく浜田初次郎が独立しての仕事なのにペケを出してしまって誠に申し訳なく思いました。実はこれは、大正11年ですが、ミーレの2回転が秀英舎さんに2台入っておりますので、これを拝見して、と言っても上から見ただけで設計をしたものですから、そのためにペケな機械が出来たのだと思います。それでは、オフセットの半裁をもうひとつ造って見ようじゃないかと、印刷シリンダーを極く小さくしたものを造ろうと12インチ、300ミリくらいの直径のものを考えました。これも手差しを造ったのでは、とても差しきれないというので途中で挫折してしまいました。幸か不幸か12年の震災にぶつかりました。そして、工場ももちろん焼けましたが、中途半端なこれから直さなければいけないような製品も全部焼けてしまったので良かったと言っただけですが、とにかく日本橋の中西商店から3万円程を借りまして復興に乗り出したわけです。

幸いにして中村時代に造りました中村製のオフセットがかなりたくさん焼けましたので、これを持ってきて、ヤスリで削って、磨きまして修理をしてやっと息をついたという思い出があります。考えますと、大正10から11年にかけての損をこれで取り戻したとも言えますか、言い換えると関東大震災は浜田にとって大成の好期だったと言えるわけでございます。



(6) 軌道に乗って

大正13年の半ばぐらいまでは震災で焼けた機械を削って磨く修理に追われていました。当時工員は30名ぐらいで、只今成功しておられる方もいますが、中西孫太郎氏などいます。そして私は、早速、列のオフセット印刷合資会社さんで造っておりました。前にスケッチして造った中村の自動をもっと進んだものを造ろうと思い、その設計に取りかかりました。これもスケッチをして土台が出来ておりますので私の頭の中にまだ記憶に残っておりますので、割

合早い時期にこれが完成しました。これの5、6台めに、フィーダーが初めて、バキュームで吸われるものになりました。またその時代に小石川の精美堂さんにハリスの空気で吸っていく、いわゆる今のストリウムではないその前の型のハリスが2、3台入っていました。これらを観察して良いところだけ真似しながら、フィーダーを真空で吸い上げて持っていく方式に改良しました。それまでは、ゴム車で繰り出していて、これは2度目の印刷の時に前の印刷を汚してしまうおそれがありまして、確かにバキューム方式が理想的でした。そんなわけで改良したものをどんどん造りまして、大正14年頃には、これが軌道に乗り、結局、戦前、戦後を通じて長い間業界に浸透し、何がしかお役に立って今日に至っているのではないかと思います。

それから2色のほうは、昭和5年だと思います。その頃もまだ秀英舎と言っておられたと記憶していますが、ハリスの2色が1台入りまして、その胴の配列をチョット見て、感心して、かつての1色の自動にその配列を応用して造ったのが、今でもございますがWO型という機械です。それで、同じくこれの応用で2色の試作をしたのが昭和5年です。このときに大橋光吉さんからは直接お誉めの言葉をいただきました。あの時のフィーダーは1分間に60枚でした。

大体昭和に入りまして、1色自動、2色自動、これらがいわゆるCO型と称し、あるいはWO型と称し、そのうちに共同印刷の大橋さんは機械に非常に興味をもっておられる方で、ご注文するときは12台の注文で、そのかわり随分と値切るんだらうと思っていました。それならばもう少し簡単な2色を造ったらいいだらうと思い、新2色というようなものを造って12台納めさせてもらいました。かなり当時としては、初期の目的を達していたんではないかと考えるわけです。

その後よそにもかなり納めましたが、当時2色機は三大会社さんに入りましたが、その他の会社には手差しの進歩した機械で、今でもありますが、中小会社さんに入っております。

その時代に月間雑誌の印刷にかなり起用されていたように思います。これに引き続いて出版関係が多かった榎町の日清印刷さんにも、輪転機を何台か入れさせてもらいました。そのうち今度はアルバートの高速輪転が入り、これも早速拝見させてもらいまして、見よう見まねで、フレキソの知識を加えまして、第1号機をダイヤモンド社に納めましたが、当時ダイヤモンド社はいわゆるストップシリン



ダーが3台ぐらいでゴロンピシャンとやっておりました。つい最近までその1台が現存してたという話を聞きました。そして輪転機のスピードと申しますか最初のスピードが精々17、80枚だったのが、改良型は250枚ぐらい出るようになりました。

(7) フィーダー

これは戦後になりますが、凸版印刷さんは輪転に対しての進出がかなり遅れておまして、秀英舎さんと日清印刷さんが合併されてからだと思いますが、もう亡くなられた方で、川合さんという人が本所工場長時代にオールサイズの輪転、と申しましても巻き紙を切ってから印刷をするという、枚葉と輪転の中間みたいな機械ですが1台入ってまして、そこへ当時としては高速輪転を2台入れました。ところがこれを使える人がいない、何とかならないかということで、日清印刷にいた稲本という老人を引き抜きまして、凸版印刷さんへ押し込んだという話がありますが、これが凸版さんの輪転機への進出の始まりだったということになります。その後、凸版さんはこの点の意欲が強く、私どものほうにも色々と宿題を出され、最後に納めた輪転機は枚葉としては最高の1分間に400枚を出すものを造りました。この機械をなんとなくT1と名付けました。カタログにもT1型と載せましたところが、すっかり大日本さんに冠りを曲げられて、決してそういうつもりでつけたわけではないんですけど、これはTは凸版さんと浜田の名前じゃないかというわけです。今ではもちろんご了解をいただきましたが、そんなようなエピソードもございました。

昭和9年に浜田印刷機製造所という浜田初次郎個人が会社を組織変更しまして、これも井上源之丞さんのご親切な指導とご示唆があったわけです。当時百万円の株式の会社になりました。そのすべての仕事は凸版さんの黒瀬常務さんにやってもらいまして本当にこの方にはお世話になりました。私もこの時に役員に入れてもらいましたが他に役員は、個人的に知っていた区会議員などをやっていた小川亀四郎という人とさらに相談員としてミツワ石鱈の営業部長をやっておられた波多海蔵さんも入られこれは井上源之丞さんや浜田初次郎の別の意欲があって、というのは新聞関係でございまして広告のほうではミツワさんは新聞社を牛耳っていて、それで相談役に迎えたことによって当社は新聞に進出したということが言えると思います。それで結局、名古屋新聞に輪転を入れました。当時東京機械は輪転機においては前世紀に近い輪転でしたが、もっとも大正におき



ましては、新聞社もマリノニから入った10枚重ねでアオリ出しの輪転を使っていましたから、それから比べるとずっと進歩しているわけです。その後輪転機は毎日新聞に入ったのではないかと思います。それを模倣してごく簡単な輪転で、5万部ぐらい、回転にすると200そこそこのものが出来ていた時代に、当社としては、8万クラス、350回転というのを造りました。そして、これを当時の名古屋新聞に1台入れました。そしてこの手づるも井上源之丞さんのお力添えによるものでした。その後京都の京都日日新聞にも8万クラスが入りましたが、とくに日日新聞は色刷りに興味をもっていて、まだまだ中日さんがかって怪しげな色刷りを造る前でして、その時に色刷りをしました。現在の印刷通信の谷本さんがその工務係長をしていましたが、このとき私ども銅版の色刷りを凸版会社さんをお願いして立派な色刷りを造りましたが、やっぱり時間との絡みから版が出来ませんで、最後は目的を達せられませんでした。刷ったということで新聞輪転での色刷りをしたということは達せられました。確か会社が出来てからですから昭和10年頃だったと思います。

(8) 戦争の影響

当社が輪転に進出した頃、たまたま大阪へ工場を作らなければならないということで、当時山本インキの山本忠吉さんの斡旋で、大阪毎日新聞では保全の工場がなく、それで工場を作ったのが現在の浜田印刷製造所です。そこを作るときに輪転機をどうしようという問題があり、それでは毎日新聞の肝入りだから大阪で輪転機をやるんじゃないかということで、それ以来東京の工場では止めることになりました。もうひとつには昭和14年に戦争がだんだん峻烈になってきて、印刷機械の製造が禁止になりました。確か7月だったと思いますが、金属を使った製品の製造禁止令がありまして、印刷機械もその中に入っていました。金属を使用して作れるのは軍部だけか、都道府県の許可を受けたものだけになりました。私どもの浜田ポッターは水路部にかなり入っていましたし、陸地測量部には大阪の中島さんがかなり進出していました。その後教科書を刷るというので1、2台輪転機を造りましたが、当時もう大日本印刷さんになられてからだと思いましたが、菊全の2回転を14台という注文を受けておりました。当時の社長は、青木さんだったと記憶していますが、14台のうち2、3台納めた頃に発令があったので、それで全部ご辞退するはめになってしまいました。



またその頃に、京橋周辺の印刷屋さんを手差しのオフセットをかなり納めました。その中で、現在の熊谷印刷の創設者の熊谷さんは機械の月賦販売という方法を浸透させまして、今だから言えることですが、これはもう大変儲けさせてもらいまして、東京周辺の印刷屋さんには、浜田の機械がかなり入りました。それから、この熊谷さんという方は大変義理堅い人で、この方が中心となってやられたことだと推察しますが、「浜田顕彰会」というのを作っていただきました。その時に、稲田さんという方に音頭をとっていただいて会長には土屋さんがなりまして、皆さんで胸像をご寄贈いただきました。その胸像は、ただいま亀戸工場にございますが、少し傷んでおりまして、欠けたところもございます。この胸像にはもちろん凸版さん、大日本さん、共同さんのお名前も載っておりますが、土屋さんをはじめ東京の小さい印刷屋さんのご好意で寄贈いただいたものです。これに対して、浜田初次郎は浅草に席を借りきりまして、全員をご招待してお礼したことがございました。このようにして14年以後、戦争もだんだん激しくなってきました、何とか工作機械をやらなければいけないということになりましたが、当時のことですからろくなものは出来ませんので、結局平面研磨版をやろうというところまでできました。この時も浜田初次郎の商魂の逞しさがものを言いまして、いつのまにか軍需省の管理工場になりました。そうすると今度は印刷が出来なくなり、印刷機械をやっているお前はあっちへ行けということで旧工場へやらされました。ところが人間がひとりもないし、当時、航空写真が重要視されていたので印刷するのに機械を造らなければならない。これはもう部数が少ないので校正機でも造ろうというのだが、とにかく人間が誰もいない。そこで召集を受けた水兵さんが20人ぐらいと、府立工芸の印刷科の生徒さん20人ぐらいを集めまして、軍隊式にやらせていただきましたが、とにかく素人さんばかりなので、ろくなものが出来ませんでした。



(9) 10年近くのブランク

東京工場、大阪工場もそうですが、材料が無くなってとうとう終いには爆弾の穴明けを大分やらされました。終戦になって、その爆弾を持っていたんではこりゃ大変だということで、近くの川にみんな放り込んでしまったのですが、未だに上ってこないところをみるとまだそのままになっているのでしょう。

終戦の詔勅をうけて、私どもも皆さんもそうですが、啞然としているときに、浜田初次郎は、その16日にはすぐに動き始めました。

まず凸版会社の板橋へ行きました、ずっと一通り見回してからこれとこれをうちへ持ってこようということで、そこにはポニーとラジカルミーレがありました、そこでお前済まないが鋳物屋を見つけてこいということで、確か18日に河口まで出かけて行きましたが、どこへ行ってもまだ店は閉めていました。とにかく16日に動き始めたというのは大変なものでした。もうこれからは工作機械じゃ駄目だ、印刷機械でなければということで、足袋裸足で飛び出したというようなわけです。これは、自分で勝手に先方様へ行って、焼け跡を見て、これとこれを直してやろう、これは駄目だというふうにチョークで印をつける始末で、このことが後の朝比奈がラジカルミーレをやるもとになったわけです。

幸い当社の亀戸工場は焼けなかったもので、施設はそのままでしたので、翌日から仕事が出来た状態でした。それで一応人間を集めて、態勢を整え、修理が出来たようになりました。とはいっても私どもだけでは出来ません。幸い篠原さんの船橋工場、私どもの浦和工場、さらには朝比奈さんの工場も残っておりました。

昭和14年から20年のブランクと20年からの修理の仕事で、機械造りはなかなか新台にかかってはおられませんでしたが、そこへもってきてお札のフォームでございまして、いわゆるガタンピシャンの凹版を造れというので、これがちょうど印刷局でございましょうか、大蔵省管理工場としてももちろん共同さん、凸版さん、大日本さん、さらには図書印刷さんが中に入りまして、結局私のほうで図書印刷さんと大日本印刷さんの凹版を引き受けたわけですが、これが全部で40台程ありました。これは以前にもありました特殊機械で、中島さんと競り合いました、凸版会社さんの板橋工場が完成した披露のときに井上源之丞さんから、お前のほうが高いじゃないかと言われて中島さんに取られたということがございました。中島さんでは6千何百円かでした。それでも何台か造った経験がありましたが、こんなわけで新台の設計が遅れました。

ひとつ面白い話がございます。そのうちに進駐軍の3人の将校がこられまして、これはてっきり戦争中に爆弾を作っていたのでその調査だろうと思ひまして、爆弾のカケラは落ちてないかと騒ぎました。そんなふうで2階へ上げてウイスキーや何かで歓待したわけですが、実はその調査というのは戦時中、誠に貧弱な文化機器修理加工共同組合という組合が出来まして、一応工作機械を造るようになってから精密機械協会という名前になりまして、浜田初次郎はその組合長をしました。これは統制を受けている関係上すべてそういった団体に属していました。要するにその調査は占領施設の印刷



部門の管理の調査にきたわけです。

(10) カイメン？

将校が調査にきたときに、また感心したのですが、このときに浜田初次郎は大正7、8年にアメリカへ行ってきた経験でしょうか、2階へ上げてもてなしているときに、ちょうど女の子が紅茶を持ってきてドアをノックした。そのとき“カイメン、カイメン”と盛んに言うんです。はて、カイメン？ 何だろうと思っていたら“カムイン”のことだったんですね。こんな時にとっさに出てくるなんて、偉いやつだなあと感心しました。

新宿の伊勢丹の裏にGHQの印刷施設の一部として印刷工場が出来ました。当時アメリカから機械がきて、これの管理をやらされました。それを見て当社でもストリウムシーダーの機械を3台ばかり造らせてもらいました。 何しろ昭和14年から20年にかけてのブランク、20年以降の修理、そして凹版の仕事などでオフ機を造る仕事はかなり遅れたわけですが、天下の東芝さんがオフに乗り出したので、これはいけないということでオフに切り替えました。この点で当社はオフにとりかかるのが後手に回ったのではないかと思います。幸いにサンプルは占領工場でしょっ中見られましたが、スケッチはやらせてもらえませんが、見るだけ見て真似て造りましたので最初のものはいい加減な機械でしたが、それでも80枚は出るものでした。これは最初大日本さんに2色、

4色がズラリと並べられまして、24時間フル稼働で、これを株主総会の営業報告書の1面にデント出したことがございます。大変儲けられたかと思いますが、使いが荒いしそんなような機械でしたので、あまり良い評判にはなりません。結局これがもとなってその後他のメーカーさん、小森さんなどがアレに乗り移ったチャンスじゃないかと存ぜられるわけです。まあ小森さんとは特許の問題で少し争いましたが、その時山田三郎太さんの鶴の一声で収まりました。考えてみれば随分愚かなことをしたんじゃないかとも思われます。戦後のユニットの進歩の始まりはこの辺ではないかと思われます。

私のほうとしましては、ミーレはまだ入っていませんで、ハリスばかりでしたがミーレのいわゆるユニットのタイプの3本胴の写真を大分方々から頂戴しましたし、現実に見ても参りましたが、私ど



も未だに宿題になっていますが、中間胴の2台胴に対して精度において随分と色々な難点があります。そういうことで3本胴でスタートを切ったわけですが、ところが、厚紙がだんだん皺が多くなってきて結局2度印刷面を合わせるのでもどうしても汚れを防ぎきれない、ということで1本胴が良いということになります。そういうわけでただ今、私どもも1本胴に乗り移りつつありますが、これにはまだまだ多くの宿題が残っております。戦後だけでもこの問題で三転、四転しつつありますが、この三転、四転の間に現在ある状態です。カタログには120枚は出ると載せますが、これが必ず適正なスピードとは申せません。こういった点から考えますと印刷機はアメリカに負うところが多かったと言えます。

戦前はローランドなんていう機械は二流三流の機械でしたが、現在では天下を風靡していると言えます。私が1952年に渡米してミーレに行きましたところ小型はドイツで造っているという話でございました。それも売る時はアメリカ国内ではミーレのマークをつけて外国にはローランドのマークをつけるというようなことで確か菊全程度の1色の機械でかなりよく出来ておりました。そういうわけで技術はアメリカからヨーロッパへ行ったというわけです。

(11) 独の大和魂

私が2度目にアメリカに参りました時にサンフランシスコにゲットナーという大変な商売人がおまして、印刷工場をやっており、当時私どものA裁を売ろうじゃないかというところまで話が進みまして、ミーレ・ローランドの真似したものを1、2台納めました。やはり真似したものは本物には敵いませんで、結局それは現在叶断ち切れになっています。とにかくその技術はアメリカからヨーロッパに渡って、それにヨーロッパのドイツのあの企業精神というか、ちょうど日本の大和魂と同じ精神が含まれて今日のローランドが生まれたと存ぜられるわけです。当時ヨーロッパは英国以外は一斉ビザが入りませんで、現在でもそうですが、それで古ぼけたパスポートでもこれ1枚あればどこの国へでもいけますし、日本みたいな島国と違って鉄道でも接続をしないで行ける関係上、市場の獲得には日本と全く対象市場の考え方が根本から違ってそこにやはり投資のスケールも違いますので、あのような立派なローランドなんていう印刷機メーカーが出たのだと思います。かつて私どもは、なんだ印刷機械屋かと軽蔑された覚えのある者にはこんな嬉しい、こんな幅のきくことはないと思っています。



戦後、池貝さんは共同さんの出資を受けて2回転を何台か造ったことがございますが、これは業界にどこまで貢献したかということになりますと疑点もございます。また、日立さんなどは凸版さんの指導を受けて、これはもちろん戦後でございますが、2回転を造りましたときに、これも、2回転じゃ印刷機械は面倒くさい割に金にならないという結論でございました。

その後オフ輪というものが普及しましてこれに向かって進んでおられるということは、大会社が印刷機械をやっている、従いまして、現在産業機械の10位のうち5本の指に入るとというのが印刷機械でありまして、そんな具合で、今年でたしか9年目になると思いますが、国家制定で技術士という制定がありますが、この中で印刷機械部門があるという程になりました。これらを考え合せて、さらには天下の三菱、日立が印刷機械に取り組むということは、本当に産業中におきまして重要な地位を占めている。そして非常に精度を要する難しいものだということになったことは、かつて鑽とハンマーで仕上げたことを思い浮かべてみると隔世の感があると考えられます。こうやって考えてまいりますと印刷機械の進む道はまだまだ遼遠なものがあると感じると同時に、かつて肩身を狭くした私にとって、1日でも先にそれを手がけたという誇りを持っています。この点につきましてはオフ輪にいたしましても確か1952年に米国に行ったときにはまだございませんで、56年、朝日の要請もあって、テクニカルアドバイザーとして行ったとき、ちょうど前に行ったときLTF、リソグラフィック・テクニカル・ファンデーションの協会に加盟してきましたので今度は、朝日の重役さんである斎藤さんと一緒に大きな顔をしてついてきました。その時、オフセットの印刷の新聞関係の工場はないかと言ったら、アメリカにはまだどこもないということで、まあ、LTFには1台あるがあれはロクな物は刷れないということでした。それでその機械を見せてもらいましたが、電話帳なんかを刷っている程度でした。それで、どこかで新聞関係をやっているところはないかと聞きましたら、オーストラリアに行ったら1軒あるから紹介してやろうかというのでオーストラリアに行く計画も、金も無いから駄目だと言って止めました。



(12) 表紙の立派な……

それから数年してアメリカにオフ輪が出てきました。ヨーロッパではそれより早くにアラーでオフ輪を造ってしまっていて、当時朝日では、いわゆる“闇”で取引きをしていました。アラーでは印刷屋で

ない新聞社だということで肝入りしてくれまして、札幌でも有楽町で見る新聞と同時に見れるということに、先代のアラーの社長が力を入れてくれました。アラーの本社というのはデンマークにありまして、私を含めて4人で参りましたが、今では労働基準法に触れるほど厳しく、工場の中に入ると鍵をかけて、外来者の面接は11階ぐらいの塔のようなところに応接間がございまして、済んだらエレベーターで降りて工場に入るとまた鍵をかけます。日本ではとても想像の出来ないような状態です。しかし、それはデンマークの本社だけで、スウェーデンのほうは全くオープンでしたので、2、3の方には本社と同じものが置いてあるからスウェーデンのほうを見学して来いと勧めています。そういったわけで1956年にはヨーロッパにオフ輪があったわけですが、日本ほど立派な印刷物は刷れません。現在でもそうだと思いますが……。

アラーの印刷でひとつ驚いたことがございます。これはもちろんサテライト型の4色ですが、みんな巻き紙が下から全部入ってきます。版とゴムのときには平らでなければいけない、また紙とゴムのときは片方のひとつのレールの中に4分の1の部分に、ちょうど2分ぐらいの厚紙が入ってしまっていて、出てきたものはステッカーでパチンと化粧裁ちもしないで、綺麗に仕上がってそのまま製品になります。これはどうしたものかと思ひまして質問しました。これにはコツがあるということで聞いてみましたら、パッキングがビリヤードクロスだと言うんですね。それは玉突き台の羅紗が2枚入っていて、片方は多少厚い紙が入っていますから、そこを印刷して、同じレールでもってこちら側を印刷するというわけだったんです。

1週間で刷る週刊誌なんかはもったいなくて刷ってられない、悪口を言えば、確かに物資がない日本がなんだ、ということになります。良く言うのなら、あれだけの印刷物を刷る技術の進歩は大したものだと言えそうです。やはりあいつの週刊誌などは商業印刷として算盤に乗せた印刷として、日本の週刊誌ほど立派な印刷物はないんじゃないかと思えます。内容はともかくとして表紙は大変立派です。また表紙を良くしなければ売れなくなるというのは、国民も悪いんじゃないかと思ひます。とにかくもったい。

